

# JaNP+

Japanese Network of People Living with HIV/AIDS

編集発行/日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス  
〒160-0014 東京都新宿区内藤町1-7ホトクビル402 [TEL]03-5367-8558 [FAX]03-5367-8559  
[E-mail] info@janplus.jp [ホームページ] http://janplus.jp/

News Letter

June, 2010 No.9

## CONTENTS

- JaNP+, NPO法人に ..... 1
- スピーカー派遣を振り返って ..... 2
- シンポジウム「告知後に何が起きているのか？」 ..... 3
- 日本エイズ学会参加支援スカラシップ ..... 3
- from friends of + 入国規制撤廃は何を意味するのか ..... 4
- 拠点病院のアンケート調査に助成決定 ..... 4
- これからの活動予定 ..... 4

## JaNP+はNPO法人になります!

NPO



2010年4月、ジャンププラスは特定非営利活動法人の設立を東京都に申請致しました(2010年8月認証予定)。もちろん、「HIV陽性者が秘密を抱えることもなく、社会的な不利益を受けることもなくHIV陽性者として、自立したあたりまえの生活ができる社会を目指す」という活動の目的や、これを支える「情報提供」「アドボカシー」「ネットワーク」という3つの活動の柱は、これまでと全く変わることはありません。また、NPO法人化に伴いジャンププラスのロゴもリニューアルいたしました。今後とも皆様の変わらぬご支援を賜りますよう、何卒宜しく願い申し上げます。

小さなちからを大きくつなぐ



### [ 設立時の団体概要 ]

#### ●設立時の名称

特定非営利活動法人 日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス

#### ●設立時の住所

〒160-0014 東京都新宿区内藤町1-7 ホトクビル402

#### ●設立時の理事

代表理事 ..... 長谷川博史  
日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス 代表  
理事 ..... 樽井正義  
慶應義塾大学文学部人文社会科学部哲学系 教授  
理事 ..... 佐藤未光  
Rainbow Ring 代表  
理事 ..... 藤原良次  
特定非営利活動法人りょうちゃんず 代表  
理事 ..... 池上千寿子  
特定非営利活動法人ぶれいす東京 代表

●設立時の正会員数 11名

### 新しい時代のHIV/エイズと向き合う これからのジャンププラスがめざすもの

代表理事 長谷川博史

2002年4月22日、数人の有志たちと「HIV陽性者があたりまえに生きることのできる社会」の実現を目指してジャンププラスを設立しました。それから満八年が経ちました。いまではHIV陽性者スピーカーや全国交流会などをはじめとして複数のプロジェクトが動き、参加者の地域も全国に広がりました。この数年、HIV陽性者自身による活動も活発になってきました。これもみなさんのご協力とご支援のおかげと感謝しております。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

HAART登場以来、治療技術はさらに進み、HIV診療を行う医療機関や医療者の数も増え医療へのアクセスも少しずつ改善されてきました。こうして日本ではエイズの死の恐怖から解放されつつあります。

いっぽう私たちHIV陽性者を取り巻く社会環境はどうでしょうか?

治療の進歩によってエイズによる死亡者数は激減したものの、療養の長期化に伴い治療を続けながら生活する上での問題点はむしろ増えてきており、その内容も多様化しています。特に社会生活を送る上で問題に関してはジャンププラス設立当時、否、日本にエイズが登場した当時からそれほど前進したようには思えません。

相変わらず、多くのHIV陽性者が感染している事実を身近な人たちにまで知られないように気を使いながら生きています。自分以外のHIV陽性者と出会うこともなく、生活場面で相談したり支援を求めたりする相手も無く不安を抱えながら病院に通っている孤立した人たちもまだまだ少なくありません。また、治療の長期化による副作用の問題はますます深刻なものになっています。いま、医療には「死なないための医療」から「よりよく生きるための医療」への枠組みの転換が求められています。

ジャンププラスが求めているものはHIVを持ちながらも当たり前生きて行くことです。医療体制も限られた病院でウイルスのコントロールをするだけでなく、歯科や、外科、産科など自分の生活圏で安心して受診できる地域診療の必要性もますます高まってきます。仕事も、地域での日々の暮らしも、恋愛や結婚などの個人生活も、私たちHIV陽性者が社会的にも心理的にも負担なく「あたりまえに」享受できる社会でなければなりません。

そのために私たちはさらに社会に働き掛けていく必要があります。それはとてつもなく大きなことのように聞こえますが、一人ひとりの「小さなちからを大きくつなぐ」ことで実現するものだと私たちは信じています。

ここに向けてジャンププラスは本年度NPO法人化を行い、より強いネットワークを目指します。

# HIV陽性者スピーカー派遣 ~3年間を振り返って~

Speaker

HIV/AIDSを知るには、単に知識を獲得するだけではなかなかうまくいきません。

「当事者の声」を通して、HIV/AIDSを伝えるために、ジャンププラスは数年に渡ってスピーカーを派遣してきました。

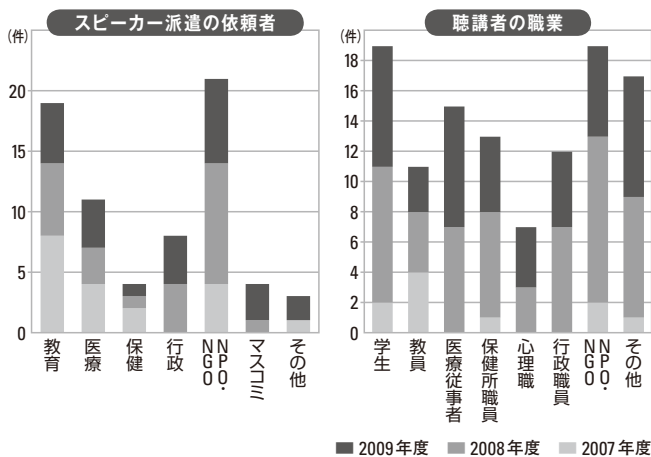
感染予防を含むHIV/AIDS問題の理解のためには、実際に感染した人々の生活や医療の実情に触れ、リアリティを得ることは重要です。しかし、書籍やパンフレット、WEBサイト等の媒体からの情報だけでは、「実際にHIV陽性者が存在している」という実感や、「HIVが自身と無関係な問題ではない」といった認識に至りにくいと考えられます。一方、現在の社会においては、陽性者が自身のステータスを周囲に開示することは困難に伴うため、一般の人々としては陽性者の経験や、経験から生まれた視点や考え方を聞いたり、質問をしたりする機会を得ることは稀でもあります。

そこでジャンププラスでは、HIV陽性者が当事者としての視点で社会に等身大の語りを提供することにより、「HIVが他人事ではなく、身近な問題であること」を社会に認知してもらうことを目的として、2006年よりHIV陽性者スピーカーの派遣を行ってきました。今回は、過去3年間の派遣実績について振り返ってみたいと思います。

## これまでの派遣実績

2007年度は19件、2008年度は25件、2009年度は26件と、3年間で累計70件の派遣を行ってきました。これを聴講者数で計算すると、約7300人の方に当事者の話を聞いてもらったことになります。

スピーカーの派遣先は、学校、行政、医療従事者、HIV/AIDS関連のNGOなど比較的小さな会場から、講演会やシンポジウムなど公開性の高いイベント、そしてテレビ、新聞、雑誌、インターネットのようなメディア媒体の取材まで多岐にわたっています。派遣先地域も、北海道から沖縄まで、全国各地にわたっています。



グラフの数値は、主要な統計原票となる「派遣依頼書」の整備・回収状況を鑑み、2007年度以降を対象に集計しています。

## スピーカーの話を実際に聞いてみて

HIV陽性者スピーカーの話を聞いた方がどう思われたか、アンケートにお答え頂いたご感想をいくつかご紹介します。

- 一般論ではなく、ご自身の体験としてお話しいただき、より身近な視点から捉えることができたように思います。

- HIVやAIDSのことは他人事で何かわかっていませんでしたが、今日のような講演会により知ることができました。もっと、自分、相手を大切にしようと思いました。
- 最初、ゲイと聞いてびっくりしたけど、話を聞いて、受け入れられると思った。
- 自分のため=相手のため、それが予防啓発のキーワードになると感じました。
- 医療者側が経験がないこともあり、構えすぎてしまうことがあり、それが伝わると、される側にも伝わるんだなあと感じた。
- 私の中でセックスとコミュニケーション、セックスと性欲…どうもコミュニケーションのことを強調してしまう(性教育の時など)要素があります。性欲があることは悪いことではなく、自然なこととして捉えられるようになってほしいと思いました。
- エイズという病気を見るのではなく、“その人”自身を見ることが大切だということが印象に残りました。
- 私自身だけの知識として持つておかず、まずは、身近な職場の人にも伝えていきたいと思いました。身近な人からの理解を得ていくように…。

## スピーカー派遣活動の効果は？

- 1 機会の提供**  
多くの人にとってHIV陽性者(開示している人)と出会う機会が少なく、研修や事務局の仲介など一定のプログラムに基づき継続的・安定的に機会を提供しています。
- 2 リアリティの喚起**  
知識や情報としてHIVを把握している人も、実際に陽性者から直接話を聞くことで、それまで感じていなかったHIVに対するリアリティを喚起しています。
- 3 新たな気づきの醸成、共感**  
陽性者に対する理解を通じて、HIVに関する様々な問題が、陽性者に限らず社会全体、あるいは自分自身の問題とつながっている、という気づきをもたらしています。
- 4 自身の行動への反映、周囲への広がり**  
自身の行動や、周囲との人間関係、またはそれぞれの職業の中で、気づいたことを反映して、この意識の変化を醸成しています。

## スピーカー派遣 今後の課題

これまででも、可能な限り派遣ニーズへの対応を行ってきましたが、多様な依頼にニーズに対応する上での障害が多い現状があります。継続的、安定的な運営のためには、十分なスピーカーの人数や多様性(居住地域、年代、性別、セクシュアリティ、得意テーマなど)を確保することが前提となります。また、こうしたスピーカーを全国で育成するためには、研修の開催資金を調達しなければなりません。さらに、派遣依頼を増やすための広報の充実も必要であると考えています。

# シンポジウム「HIV陽性告知後に何が起きているのか？」開催

What happened?

多くのHIV陽性者にとって、陽性告知の場面は人生における大きなターニングポイントとなっています。その一方、医療の進んだ現在では、陽性告知は人生の一場面ではありませぬし、また治療も日常生活の一部ではありませぬ。このような状況下で、告知後のサポートはどのようなものかともめられているのでしょうか。

HIVの検査を受けるまでの経緯や動機、本人の心の準備と告知のされ方は非常に多様です。HIV感染という事実と直面したとき、本人がHIVと向き合っていくためにどのような検査環境や告知のあり方、必要なサポートが求められるのかを考えることが、改めて重要になってきていると、私たちは考えています。

そこで2009年、JaNP+は特定非営利活動法人ふれいす東京との共催により、鳥居薬品株式会社の後援を得て、“陽性告知とのその後”をテーマとした2年がかりのプロジェクトを発足し、その一環として4月29日にシンポジウム「HIV陽性告知後に何が起きているのか？」を開催しました。

シンポジウムでは、プロジェクトで実施しているHIV陽性者を対象としたインタビュー調査の中間報告や、医療や検査、保健、支援といった様々な立場からの講演が行われました。これらの講演やパネルディスカッション、フロアからの意見等を通じて、検査を受けるまでの経緯や準備性、環境といった受検者側の多様性と、経験値の差や体制の違いといった検査や医療を提供する側の多様性の対比が示されました。さらに、HIVの問題に携わるそれぞれの人々が広くネットワークされ、協力し合って多面的な取り組みを行っていくことが、結果として、陽性告知を受けた当事者が自分自身を取り戻し社会生活を送っていくために必要なのではないか、といった提議もなされました。



井上洋士氏

日時:2010年4月29日(木・祝) 13:30～16:30

会場:津田ホール

出演者(敬称略)

井上洋士(放送大学 慢性看護学・健康社会学 教授)

小島弘敬(東京都南新宿検査・相談所)

大木幸子(杏林大学地域看護学研究室 教授)

山元泰之(東京医科大学病院臨床検査医学科 臨床准教授)

矢島嵩(特定非営利活動法人ふれいす東京 新陽性者ピア・グループ・ミーティング <PGM> コーディネーター)

長谷川博史(日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス 代表)

◎シンポジウムの内容は近日中にジャンププラスのWEBサイトで公開する予定です。

# 日本エイズ学会参加支援スカラシップ 「HIV陽性者による第23回日本エイズ学会参加報告会」開催

Scholarship

HIV医療体制は、患者も積極的に医療に参加してゆく先駆的治療の実現が求められます。これは「患者中心の医療」の実質的展開そのものです。しかし、様々な意見を出し合い討議され、新たな治療の在り方が提示される日本エイズ学会は、専門家ではない多くのHIV陽性者にとって経済的、地理的、心理的に参加のハードルが高いのが実情です。

このため、複数の当事者団体や支援団体の協働により、スカラシップ(学会参加費援助)が毎年実施されています。2009年度は社会福祉法人はばたき福祉事業団、特定非営利活動法人ふれいす東京、LIFE東海およびジャンププラスの4団体で委員会を構成しました。

1月31日には、実際にスカラシップを通じて学会に参加した当事者による報告会が開催されました。報告会にはHIV陽性者ならびに支援団体関係者、HIV陽性者の自立及び社会参加の意欲向上に関心を有する一般の方等51名の方が来場され、学会に参加したHIV陽性者による発表や、スカラシップに関する質問、社会への還元に関する問題提起などが活発に行われました。

日時:2010年1月31日(日) 13:30～16:00

会場:新宿文化センター

内容

1. 大平勝美(社会福祉法人はばたき福祉事業団 理事長)  
「当事者による学会への参加の意義」
2. 大槻知子(財団法人エイズ予防財団/特定非営利活動法人ふれいす東京)  
「HIV陽性者学会参加支援プログラム・これまでの取り組み」
3. 高久陽介(財団法人エイズ予防財団/日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス)  
「参加報告書の発行について」
4. 第23回日本エイズ学会参加支援スカラシップ受給者3名  
「学会参加者による報告 ～陽性者の視点で見たエイズ学会～」

◎スカラシップを通じて学会に参加した陽性者によるレポートを発行しています。報告書をご希望の方はジャンププラスまでお問い合わせ頂か、またはウェブでもご覧いただけます。  
<http://janplus.jp/project/scholarship/>





a voice  
from  
friends  
of +

Column

産経新聞編集委員 宮田一雄  
何を意味するの  
か  
入国規制撤廃は

上海万博の開会式を3日後に控えた4月27日、中国政府はHIV陽性者の入国禁止規制撤廃を発表した。短期滞在の場合、入国希望者は入国時にHIV感染の有無を申告しなければならず、長期滞在者は入国前に血液検査による証明が必要だった。その規制が外されたのだ。

国連合同エイズ計画(UNAIDS)や国際エイズ学会(IAS)は以前から、HIV陽性者の渡航、入国を規制する国に対し撤廃を求めてきた。公衆衛生上の効果が期待できないうえ、HIV陽性者やHIV感染の高いリスクにさらされている集団への社会的な偏見と差別を助長することで予防対策の阻害要因にもなるからだ。世界の2大規制大国は米国と中国だったが、米国は今年1月に規制を撤廃し、中国もそれに続いたかたちになる。

もちろん、撤廃は歓迎すべき動きであり、中国の発表に対しUNAIDSもIASもただちに歓迎声明で応じた。だが、万博開幕直前という時期の問題も含め、私には手放しでは喜べないように思える。

中国政府は今年3月、上海の国際文学祭にオーストラリア代表団の一員として参加しようとしたHIV陽性の作家、ロバート・テセイ氏に対するビザ発給を拒否し、世界の著名文学者から批判を受けた。作家団体メルボルンPENのサイトには《中国政府の過酷な検閲に抗して「08憲章」キャンペーンを

展開した中国人作家、劉曉波氏の投獄に対し、オーストラリアが抗議を行っていることから、入国拒否は予想されるものではあった》という抗議声明も掲載されている。

中国共産党一党独裁の廃止を求めた「08憲章」の起草者とされる中国の民主化活動家、劉曉波氏は憲章発表直前の08年12月に身柄を拘束され、北京市高級人民法院(高裁)が今年2月11日、劉氏に対する国家政権転覆扇動罪で懲役11年、政治権利剥奪2年の1審判決を支持した。中国の裁判は2審制なのでこの時点で劉氏の実刑判決が確定している。

ビザ発給拒否は、劉氏を支援する動きに対し中国政府が投じた牽制球であり、その牽制球に対する海外の反発が大きかったことが今回の発表の背景にあったのではないかと私はそう感じられる。ただし、それは背景となる中国の人権事情が改善された結果とは必ずしも言えない。

具体的にHIV陽性者、HIV感染の高いリスクにさらされた集団への中国政府や中国社会の対応が今後、どう変わるのか、あるいは変わらないのか。上海万博をめぐるお祭り騒ぎにまどわされることなく、そのあたりは少し長い時間の経過の中で見ていく必要がある。

## ファイザー・プログラム助成決定 全国のエイズ診療拠点病院 へのアンケート調査

Grant

HIV/AIDSに関しては、厚生労働省の通達により指定されている「エイズ診療拠点病院」において治療が提供される、と定められています。しかし実際には、拠点病院であっても診療経験には大きな格差があり、私たち患者は適切な治療やケアを受けられないばかりか、差別的な対応や診療拒否などの不利益を被る事例も存在しています。

一方、冊子『長期療養時代の治療を考える』の発行にあたり2008年に実施された調査では、医療機関を選択する上での選択基準として「HIV/AIDSの診療の専門性」が当事者の間で上位に挙げられています。ところが、感染が分かっただけの陽性者や孤立した状況にある陽性者にとっては、「どの医療機関が専門性が高いのか?」という重要な情報について自力で知ることは困難な場合もあります。

さらに、HIVが長期に付き合っていくべき病となったことで、必然的に、HIV/AIDS以外の疾患にかかり治療を要する人も増えてきています。しかし多くの陽性者は、他の疾患を受診する際に「HIV陽性と判明することで、受け入れを断られるのではないか」といった不安を抱えています。

こうしたHIV陽性者の置かれた現状を踏まえ、ジャンププラスは「2009年度ファイザープログラム〜心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援」の助成を受けて、全国約374の拠点病院に対するアンケートを実施する

ことになりました。現在、HIV/AIDSの診療実績や他科における陽性者の受け入れ可否等について尋ねた質問紙を一齐に送付し、すでに多くの拠点病院から回答が集まってきています。今年末までには、アンケート結果をウェブサイトにおいて公開するとともに、多くの当事者に情報が届くよう、医療機関や保健所、行政、支援団体などに幅広く調査結果をフィードバックしていきます。

なお、各拠点病院の皆様におかれましては、アンケートへの回答を通じて、患者がより良い治療を得るための情報を得られるよう、回答へのご協力をお願い申し上げます。

### 活動報告 & 今後の予定 | Agenda

●3月23日(火) 平成21年度厚生労働科学研究費エイズ対策研究事業「介入困難群の予防・保健サービスへのアクセスに関する研究班」(研究代表者:服部健司)の研究成果等普及啓発事業として、シンポジウム「HIV感染予防情報は必要な人たちに届いているのか?」を開催しました。

●6月27日(日) 2009年度 JaNP+ 活動報告会を下記の通り開催します。なお、HIV陽性者限定のイベントではありません。

時間: 14:30 ~ 17:00 (14:00開場) 会場: 大久保地域センター(東京都新宿区大久保2-12-7) 資料代: 1,000円(各種会員は無料)

●8月15日(日) 東京プライドパレードの翌日に全国HIV陽性者交流会を開催予定です。詳しくはウェブサイトおよびE-mailにてご案内いたします。

### 編集後記 from editors

●春は競馬のG1レースが続きます。私の馬券成績は、毎年秋は得意で春は鬼門…今年はせめてトントンで折り返したいものです。(高久)

●今号の発行が遅れまして誠に申しわけありません。JaNP+がNPO法人になることでトントンにして頂ければ幸いです。(神谷)

●家でパソコンを立ち上げて作業をしていると、排気熱で部屋の中がモワツとしてくる。もうそんな季節なんだなあ。(加納)

### JaNP+ News Letter | No.9

編集/高久陽介・神谷浩樹・長谷川博史  
編集発行/日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス  
〒160-0014 東京都新宿区内藤町1-7 ホトクビル402  
[TEL]03-5367-8558 [FAX]03-5367-8559  
[E-mail] info@janppplus.jp  
[ホームページ] http://janppplus.jp/  
イラスト/しらいしろう  
デザイン/加納啓善 印刷/株式会社テンプリント